ガンマンの生

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガンマンの生

【Ｎコード】
Ｎ３７９７Ｙ

【作者名】
ただ書く人

【あらすじ】
長寿の時代、人々に与えられた殺し合いの場。
そこで若い女を犯したという友人の話に興味を示したひとりの老人は、ガンマンに扮し拳銃を携えて殺し合いの場に立つ。
しかし、本当の殺し合いを前にして老人は怯え、出口を探し始めた。
※「たんたんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

（前書き）

直接的な描写はありませんが、殺人や強姦といった行為がありますので、一応Ｒ１５にしてあります。
そういった行為を極端に嫌悪するような方も読まれない方がよろしいかと思います。

乾いた風が荒々しく吹く、果てのない荒野。
西部劇のガンマンに扮した老人がひとり歩いて行く。
老人の右手、数百メートルほどの距離からは、南米のジャングルを思わせる森が広がっていたが、それ以外、周りには何もなく、人影も、動物たちも、空をとぶ鳥もなかった。
森の方面から、小さな銃声が聞こえ、老人は一瞬身を固くして、森を見やった。
「あっちは危ないからな。だが、ここらには誰もいやしない」
しかし、誰もいなくてよかったかもしれないぞ。どうしたってこんなところに来てしまったのだろう。いつ死んだって構わないなんて、勘違いだった。欲があるからここに来た。だが、欲があるってことは、まだ生きたいってことじゃないのかい。何度も後ろを振り返りながら、老人は考えていた。
老人は迷っていた。出口が見当たらないのだ。
フィールドに出ると、すぐに軍人の格好をした老人に拳銃で狙われ、戦国武将のような甲冑に身を包んみ、刀を振りかぶった老人に追い回された。
幸いにして、軍人の拳銃の狙いは外れ、戦国武将は息が上がって座り込んでしまった。
老人は逃げながらも、戦国武将が軍人の拳銃に撃ち抜かれる様を見た。
さらに周囲に転がる、今はもう動くことのない空手家や警察官、探偵、浪人の姿を見て、老人はすっかり怯え、無我夢中で走り抜けた。
その結果、この荒野にたどり着いてしまったのだった。
入口に戻ることはできるかもしれない。しかし、入口付近が一番危ないという友人の言葉、先ほど向けられた拳銃や刀を思い出し、戻ることは諦めていた。

あいつが余計なことを言わなければ。老人はここに来る前に聞いた友人の話を思い起こしていた。

「おれたちが長生きしたって仕方がないだろう。税金を無駄遣いさせるだけさ。奥さんも死んじまって、働くこともできない。さっさと死んじまった方がいいのさ、おれたちみたいな者は」友人は手に持った杖で床を鳴らしながら言った。

「ああ、確かにな。おれも長生きしたいとは思わないよ」

「だろう。だから行ってきたんだよ」

「よく生きて帰ってきたな」

「大したことじゃない。ほとんどが、おれたちと同じ爺さん婆さんだ。だがな、時折いるのさ。もう死にたい。こんな人生なら早く終わらせたい。そんな具合で、悲劇のヒロインを気取った若い女がよ」

「最近の若い者は簡単に死のうとするからな」

「それでどうしたかわかるか。これを伝えたくて、わざわざ呼びつけたのさ」

友人はそう言うと、しわだらけの顔を一層しわだらけにして、いやらしさがにじみ出ているような笑いを見せた。

「犯したのさ。殺し合いをしている周りの連中も、この時ばかりは仲間だ。女を押さえつけて、順番に犯していったよ。久しぶりに興奮したね」

「なに、本当か。待て。そんな大きな声を出すな」老人は、友人の話に少し身を乗り出したが、そこが喫茶店であることを思い出して、友人を制した。

「ああ、すまない。それで、あんたにも教えてやらないとと思って、殺し合いはやめて出てきたのさ」友人は必要以上に声を小さくして、話を続けた。

「そんなことやっても大丈夫なのかい。殺し合いは認められていても、強姦はまずいだろう」

「そんなこと関係ないよ」

「女が訴えたりしたらどうする。女はどうした」
「もちろん殺したよ。あの女だって死ぬために、あそこに来ていたのだろう。死人に口なし。訴えるなんて心配も要らないさ」
「だが……」
「気にするなよ。どうせ死にに来た女だ。おれだっていつ殺されるかわからない。無駄に長生きするよりかは、楽しんでから死んだ方がいいだろう。あんたも行ってきなよ。運が悪ければ死んじまうが、運が良ければこういうこともある」

そうだ。あの友人の言葉は不快だったが、おれも期待してしまったのだ。とんだ下衆野郎だ。老人は後悔しながら、荒野をさまよっていた。
耳には風の音ばかりが聴こえ、小さな異音や人の気配を感じては振り返るが、そこには何もない。
この場所はこんなにも広かったのか。荒野はどこまで続いているのか。一向に変わることのない景色は、老人の恐怖心を駆りたてるばかりだった。
しかし、森に入る勇気も、来た道を戻る覚悟もない。
運が悪ければ死んじまう――――再び友人の言葉が頭をよぎった。
この場所に入るまでは、老人はいつ死んでも構わないと思っていた。もちろん、友人の話した若い女の話にも興味があり、あわよくば自分もという思いがあった。
だが、いざ目の前にしてみると、死はとてつもなく恐ろしかった。
女のことなど考えている場合ではなかった。
風が勢いを増し、老人は頭に乗せたテンガロンハットを手で押さえた。
老人の目の前を風に吹かれた枯れ草が通り過ぎ、彼方へと飛んでいく。
老人は歩みを止めて、風上に背を向け、森の方に体を向けた。
すると、その方向からふたつの人影が走り寄って来るのが見えた。

自分を殺しに来たものと思い、老人は横に飛ぶように半歩ほど移動したが、どうも様子がおかしかった。
老人から見て手前の人影を、奥の人影が追っているようだった。
追われているのは女だった。
「助けて」女が走りながら叫ぶ。
奥の男も何か聞き取れない言葉を叫びながら走っており、老人までの距離は、もう五十メートルほどにまで迫っていた。
男というものは、自分でも信じられないような英雄的行動を見せることがある。
老人にとっては、今がその時だった。
女性が助けを求めているのを見過ごすわけにはいかない。
捨てたつもりのこの生命。どこの誰かは知らないが、君がために散るなら本望。いざゆかんや老兵の、最期の働きとくと見よ。恐れよ何するものぞ。
老人は覚悟を決めて、足を進め、女と追跡者の間に割って入った。
「助けてください」女は老人の後ろに回って、息も絶え絶えに言った。
老人がちらりと見ると、女はまだ二十歳前後だった。シャツのボタンが外れ、手で押さえているものの、豊かな乳房が半分ほどあらわになっていた。
「よくやった爺さん。先にやらせてやろうか」こちらもすっかり息の上がった追跡者が、歩み寄りながら老人に言った。
老人を爺さんと呼んだが、老人とさほど年齢は違わないだろう。
追跡者の言葉に、老人の後ろで女が再び立ち上がる気配がした。
老人はすぐに状況を察して、女を安心させるためにも、追跡者に大声を上げた。
「何をしている。女を襲うようなことをして、恥ずかしいと思わんのか」
「ひとり占めする気か」
「あんたといっしょにするな」

こうは言ったが、この場所に入る前は自分もいい思いをしてやろうと思っていたものを、と老人は自嘲した。
そして老人は拳銃を抜いて、追跡者に向けた構えた。
追跡者はそれを見て、先ほどまで浮かべていた笑みを消すと、腰から刀身が湾曲したナイフを取り出した。
両者の距離は約三メートル。
追跡者が老人に飛びかかろうと一歩踏み出したと同時に、老人はリボルバーの拳銃の引き金を引いた。
老人のような素人が狙い通りに標的を撃つことなどできるわけがない。入口付近で老人を襲った軍人もそうだった。
老人の狙いも当然外れた。
追跡者の足を狙ったはずの弾丸は、その首を正面から撃ち抜いていた。
首から血を吹き出し、追跡者は体を投げ出すように前方に倒れた。

女は老人の見立てより少し年上で、二十四歳だった。
よくある惚れた腫れたの問題で、やけになってここに来たのだが、やはり恐ろしくなって出口を探していたところを、先ほどの追跡者に襲われたという。
老人は自分も出口を探していると言って、互いにその方が心強いだろう、と女と行動することにした。
男は星の数ほどいる。あんたを選ばない男がバカだ。あんたほどの女性ならもっといい男がたくさん現れるはずだ。まだ生きていればいいことはあるさ。老人は月並みな言葉で女を励ました。
確かにその女は美しく、痩せ細った者が多い若い女性にしては、ふくよかで魅力的な肢体をしていた。
老人に渡され、シャツの上から着込んだベストのボタンをしっかりと止めてはいるが、胸元からは豊満なふくらみが覗いている。
髪は後頭部で束ねた、いわゆるポニーテールにしており、耳元からうなじにかけて美しい白い肌が露出していた。

老人は、ほんの十数分前まで抱いていた欲望を思い出し、ここから外に出たら、この女とうまくやれるかもしれないなどと考え、同時にそれを恥じた。
「出口はご存知なんですか」女が老人の方を向いて尋ねた。
老人は慌てて前を向いて、わからないが建物の端まで歩いてみるしかないと考えていることを答えた。
また強い風が吹いて、老人は頭に手をやり、女は歩みを止めて目を閉じた。
目に砂埃でも入ったのか、女は少しうつむいて瞬きを数回繰り返してから顔を上げてると、大きな声を上げた。「あれ、壁じゃないですか」
女が指している正面を見たが、老人には何のことだかわからない。
「あの山です。壁に書かれた絵ですよ」
老人が果てのない荒野だと思っていたものは、大部分が絵だったのだ。
老人には、未だそれは本物の荒野の風景にしか見えないが、若い女が言うのだから間違いないだろう。
「それなら、壁沿いに歩けば出口もあるだろう」老人は、ようやく外に出られそうなことを実感して、深く息を吐いた。
「ありがとうございます。ここから外に出たら、何かご馳走させてください」女も安心したのか、笑って言った。
「あんたにご馳走されるような年じゃないですよ」
老人はそう言いながらも、自らの欲望を再び思い起こしていた。
そうだ。生きていればいいことはあるものだ。何かの役に立つことがあるかもしれない。長生きも悪くはないだろう。もう二度とここには来るまい。老人はそう決心し、足取りも軽く壁に向かって歩き続けた。

出口はすぐに見つかった。
壁に到着する前に、高いステンレスの柵に囲まれた場所が見え、そ

こにはその柵と同じ材質の扉が付けられていた。
ふたりがそこに近づくと、扉に「非常口」「避難路」と書かれた板が吊り下がっているのが見えた。
ようやく出られると老人は扉に手をかけたが、それと同時に短い銃声が鳴り、その体は扉に倒れかかるように崩れ落ちた。
「あんたらみたいのは毎日いるんだ。この自殺センターに来ておきながら、逃げ帰ろうとするやつが」老人と女の左奥、柵の向こうから人影が歩み寄ってきた。
女が悲鳴を上げる。
老人は腹部を撃たれ、意識はあるものの、ただ流れる血を見ることしかできなかった。どうしてか痛みも少なく、もう間もなく自分は死ぬのだろうと感じていた。
せめて彼女だけは逃がしてやらなければならないと思ったが、体を動かすことができない。
「死ぬために来たんだからいいだろう。おれは死ぬためでも、殺し合いをするためでもない。こうやって逃げようとするやつを殺すために来ているけどな」
老人を撃った男、ガンマンでも軍人でも侍でもない、黒い上着にジーンズを履いた壮年の男は、もうふたりの前に完全に姿を見せて、オートマチックの拳銃を女に向けていた。
老人はどうすることもできずに見つめていたが、女は意外な行動に出た。
女は悲鳴を上げながらも、腰に差していた拳銃を取り出すと、躊躇せずにジーンズの男に向かって発砲したのだった。
その弾丸がジーンズの男に当たることはなかったが、ひるませることはできた。
女はその隙に老人に走り寄って、その腕を取った。
自分を助けようとしてくれているのか。老人は自分に構わずに早く逃げてくれと言いたかったが、声を上げることもできなかった。
また、その必要もなかった。

女は老人の腕を取ると、そのまま老人の体を引き倒して、さらに足で蹴るようにしてその体をどけると、老人が背にしていた扉を開いた。
ジーンズの男は女に向けて発砲したが、それは命中せず、女は扉から柵の向こうに入り、その奥の壁に設置されている扉に駆け込んでいった。
その姿を見てジーンズの男は小さく舌を鳴らし、老人の横までくると、しゃがみこんで老人の頭部に拳銃を当てて引き金を引いた。

遺伝子工学の進歩により、人の老化の速度が抑えられ、平均寿命はかつての三倍以上にも達していた。
その中には、特に老人たちの多くは、人生に飽きてしまい、死を望むものもある。
そして、自死を推奨することはできないという建前もあって作られたものが、その場においてのみ殺人が許される生存訓練場だった。
通称を自殺センターという。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3797y/

ガンマンの生

2011年11月9日21時03分発行